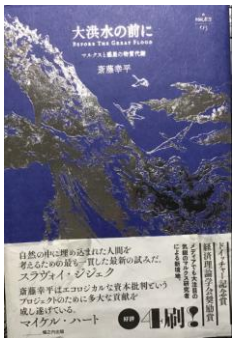
斎藤幸平『大洪水の前に―マルクスと惑星の物質代謝』

京都研究会で『マルクス解体』を報告・コメントするので、斎藤幸平さんの１冊目の学術書『大洪水の前に』を手にとった。2 年前の暮から正月に多くの付箋をつけて読んだが、斎藤さんの研究、『マルクス解体』の関係を知るうえでも参考になった。報告に関わる結論部分を抜粋して紹介する。



『資本論』では、素材的属性の無視が生産の物質的条件を切り崩し、さらには、人間の自由な発展のための条件を切り崩していくことが繰り返し批判されている。それは過労死や鬱に代表される精神疾患、土地疲弊や過剰な森林伐採など様々な形をとって, 人間と自然の物質代謝に修復不可能な亀裂を生み出していく。

だが、この亀裂がもたらす矛盾の先鋭化を永遠に先延ばしすることはできないのであり、深まる亀裂がもたらす疎外の経験は、持続可能で自由な人間的な発展をもとめる意識的な取り組みを生むのであり、そこに「資本主義の割れ目」が生じてくる。ここに資本の終わりのない価値増殖欲求に対する外的な、素材的限界があるのであり、資本主義的生産様式の矛盾を克服するためのスプリングボードが存在するのだ。

このように、マルクスは自然の限界をはっきりと認識していたがゆえに、より注意深い自然の取り扱いを社会主義構想のなかではっきりと強調したのだった。それは自然を私的所有の制度から切り離し、コモンとして民主主義的に管理することにほかならない。『資本論』は未完にとどまったが、それは資本主義のもとでの人間と自然の敵対的関係を分析するための方法論的基礎を提供するのみならず、素材的世界の立場からの抵抗を構想することを可能にしてくれるのである。それゆえ、マルクスのエコ社会主義は破局を警告するだけの「終末論」ではない。

マルクスは素材的世界の視点から、環境危機を資本の物象化した力との関連で把握していた。そのうえで、人間と自然の物質代謝の撹乱を乗り越えるためには、資本の主体化した力を廃棄することが不可欠であるとマルクスは唱えたのである。

マルクスの方法論をもとにして、マルクスの死後に明らかになった科学的知見を積極的に取り込むことによって、マルクス主義のエコロジーはグローバル環境危機の時代にこそ一層深化させられなければならない。その限りで、イムラ―のように「マルクスは忘れろ」と結論づけるのはまだ早すぎる。資本主義によって引き起こされる物質代謝の亀裂と環境危機が深まるいまだからこそ、張一兵に倣ってこう言わなければならないだろう。「マルクスへ帰れ！」。

本書は「マルクスへ帰れ」で終わるが、次の学術書では「マルクス解体」となるが。

（2024年２月９日）